

# 教員著書紹介



「現代日本の公務員人事 - 政治・行政改革は人事システムをどう変えたか」(第一法規株式会社) 【共著】 小野 英一 准教授 (政策コース)

分担執筆ページ 115-133頁  
第6章「自治体における閉鎖的任用システムと「開放性」」

(著者よりの紹介)

公務員人事を研究分野とする11名の研究者による共著です。1990年代以降の一連の政治・行政改革の下で、中央省庁及び地方自治体の公務員人事システムがどのように変化してきたかについて実証的な分析が行われています。自治体における採用や昇進などについての研究もあるので、自治体職員の皆様にもぜひお読みいただきたいと思います。また、近年の自治体職員採用試験の動向と変化についての調査・分析もあり、公務員試験を目指す学生、進路指導にあたる関係者の方々にも大変有益な一冊になっています。



現代国際関係学叢書第5巻『国際関係の争点』(株式会社志学社) 【共著】 玉井 雅隆 准教授 (国際教養コース)

分担執筆ページ 83-98頁  
「マイノリティの権利と争点化 - 朝鮮学校学費支援問題を例として」

(著者よりの紹介)

朝鮮学校の学費支援問題に代表されるように、在日朝鮮人に関する問題は双方に横たわる歴史問題、政治問題やイデオロギーが複雑に絡み合う問題となってくる。他の外国人学校が日本の高等学校同様実質無償化のための支援がなされているが、朝鮮学校は日朝間の諸問題などが絡んでその支援がなされていない。

欧州でもマイノリティの教育問題は大きな問題となっている。しかしながら、教育・文化権に関してはマイノリティ問題を人権問題ではなく安全保障問題として捉え、問題の解決を図っている。朝鮮学校学費支援問題に関しても、その問題を人権問題としてとらえるのではなく、日朝間の安全保障問題として捉えることが可能ではないか、と指摘した。



「海洋白書2019」(笹川平和財団 海洋政策研究所) 【その他】 樋口 恵佳 講師 (政策コース)

分担執筆ページ 180-198頁  
第2部(世界の動き)

(著者よりの紹介)

笹川平和財団海洋政策研究所が毎年刊行している、海洋の諸問題に対する出来事や動向を横断的にまとめた書籍です。毎年、最新の話題について専門家が執筆しています。幅広い読者に向けて執筆されており、どなたにでも活用いただけるように工夫されています。私は、第2部「世界の動き」を担当し、世界の海洋に関する1年間の出来事をまとめました。

今年から笹川平和財団のウェブサイトにおいて、最新号の内容が公開されるようになりました。無料で閲覧できますので、ぜひご覧いただけましたら幸いです。



《第2号》

# 公益大ニュース

2019.6

東北公益文科大学広報誌



02\_モンゴル日本人材開発センター  
インターンシップ座談会

04\_平成30年度卒業式・学位授与式

05\_平成31年度入学式

06\_研究活動等紹介 准教授 倉持 一

08\_研究活動等紹介 教授 阿部 公一

10\_学生での起業を語る

11\_社会貢献活動(学生の取組み)  
地域支援活動 Praxis (プラクシス)

12\_教員著書紹介

准教授 小野 英一  
准教授 玉井 雅隆  
講師 樋口 恵佳

## 編集後記

「公益大ニュース」第2号を発行しました。本学の教育・研究・社会貢献活動を広く学外に知らせるツールです。今号からこれまでの8ページから12ページになりました。ページが増えたことで、公益大を皆さんにより詳しくお伝えできていると思います。これからもよろしくお願いいたします。

広報誌 『公益大ニュース』 第2号 2019.6

E-mail : koho@koeki-u.ac.jp  
〒998-8580 酒田市飯森山3丁目5番地の1  
TEL:0234-41-1111 FAX:0234-41-1133  
https://www.koeki-u.ac.jp/

# モンゴル日本人材開発センター インターンシップ座談会



司会：准教授 玉井 雅隆  
(国際教養コース)

公益大初の海外インターンシップ。参加した3名が今回の海外インターンシップをコーディネートした玉井准教授を囲み座談会を行い、それぞれの体験や価値観などの変化について語り合いました。

## モンゴル日本人材開発センター はどんなところ？

玉井：皆さんは2週間モンゴルにインターンシップに行きましたが、インターンシップ先のモンゴル日本人材開発センターはどんなところですか？

湯本：日本の途上国を支援する機関である国際協力機構(JICA)とモンゴル国教育省、モンゴル国立大学の協力により、2002年に開設されました。現在、ビジネス人材育成、日本語教育、相互理解促進をメインに活動しており、ビジネス課・日本語課・図書課に分かれて活動しています。

中條：ビジネス課では日本流のビジネスマナーや日本式経営を教えています。日本語課では、日本語能力試験体験講座や日本語教育講座、日本語授業などを行っています。この他図書課では、日本語で書かれた本が置いてある図書館の運営などを行っています。

平沼：日本語課、ビジネス課、図書課の3つの課を回りました。どこの課も楽しかったのですが、私は特に日本語教育に興味があったので、日本語課が一番印象に残りました。

中條：そうですね。後は日本大使館に行ったり、日本語クラブで日本文化についてプレゼンテーションをしたりしました。日本文化って、結構自分が知っているようでいざ人に伝える、となると難しいですね。

## 海外インターンシップに 参加した動機は？

玉井：そうだね。身近にあるものって逆に伝えるの難しいですね。では、海外インターンシップに参加した動機はなんですか？

平沼：私は、将来海外の国際機構などで働くことを考

えていて、海外でのインターンシップを通して将来のイメージをより明確にさせたかったからです。

湯本：私はインターンシップを通して、国際的な考え方を養いたかったからです。国際教養コースで英語や国際関係論、多文化共生論とかを学んで、それを実際の目で見てみたかった、というのが大きいかも。

玉井：なるほど、確かにちょうどいいかもしれませんね。

湯本：モンゴルでインターンシップって、他の大学にはない公益大の大きな魅力です。JICAということもあって、開発援助など日本が他国で行っている貢献活動を自分の目で見るができるというもあります。

## インターンシップで 学んだことは？

玉井：それは貴重な体験をしましたね。それでは、このインターンシップを通じて学んだことはありますか？

中條：モンゴルでビジネスなど日本の様々な普及に努めているのがモンゴル日本人材開発センターであること、そして今までの活動が確実にモンゴル国内に良い影響をもたらしていることがわかりました。

平沼：やはり外国人に日本語を教える難しさを痛感しました。わかりやすく丁寧に教える工夫を考えましたね。



湯本 巴瑠季  
ゆもとはるき 山形県出身  
交流文化系国際教養コース 3年



中條 紘大  
なかじょうひろと 新潟県出身  
交流文化系国際教養コース 2年



平沼 里穂子  
ひらぬまりほこ 岩手県出身  
交流文化系国際教養コース 2年



モンゴル語研修の様子



図書課での業務



日本語教室で折り紙の実演

湯本：私が出会ったモンゴルの人たちはとても勉強熱心であり、来日・留学経験のある方が多かったです。日本に親しみを感じている人も多かったですね。

## インターンシップを通じてどん なところで成長を感じましたか、 価値観の変化は？

玉井：そうですね。ある程度の語学力を身につけておくことは重要ですね。ではさっきの質問と関連させてですが、インターンシップを通じて、どんなところで成長を感じましたか、価値観などの変化はありましたか？

中條：自分はどちらかという外国人に話しかけるのは苦手でしたが、センターで習ったモンゴル語を使って積極的にモンゴル人とコミュニケーションをとろうとしたことです。特に価値観の違う外国人とコミュニケーションをとるときには、自分が「何を伝えたいのか」を明確にさせること、それが重要なポイントであることを学びました。自分にとっての成長はこのことを理解したことですね。

平沼：インターンシップに行く前と帰ってきた後とで「海外で働く」ことに対する考え方が変わりました。海外に行く前は、漠然と「海外で働きたい、でも何をやるのかわからない」としか考えていませんでした。しかし、実際に対外支援の最前線でインターンシップをしてみて、地道な、しかし継続した支援の重要性を学びました。「今後はこのような途上国支援に関わるような仕

事をしよう」とより具体的な進路を目指すように考え方がはっきりしました。

湯本：モンゴルと日本の関係性について、自分が思っていたよりも、改めてつながりが強いと感じました。このようなことを気づくことができ、「自分は世界のことをよくわかっていない」ということに改めて気づかされました。

## 今後、どのようなことに取 り組んでいきたいですか？

玉井：それでは、最後に今後、どのようなことに取り組んでいきたいですか？

中條：語学力とコミュニケーション力が自分には不足していると思ったので、そこを強化していきたい。特に語学力はもっと磨きをかけたい。

湯本：ゼミは国際関係なのですが、ゼミで自分の専門分野を本格的に学んでいきたいです。

平沼：資格試験やボランティアなどに積極的に取り組んで、モンゴルでの経験を活かしていきたいです。



# 平成30年度卒業式・学位授与式を挙



卒業生を代表して井上道貴さんは、「私たち卒業生はこれから社会人としての第一歩を踏み出します。その道は必ずしも平坦なものであると限らないでしょう。しかし、この大学で得た学びや経験は、私たちが前に進み続ける限り、必ず力になってくれると信じています。」と謝辞を述べました。



本学の卒業生・修了生は、今年度の卒業生・修了生を加え、2,718名となりました。



3月23日(土)、公益ホールにて、2018年度東北公益文科大学卒業式・大学院修了式が執り行われ、152名の卒業生、修了生に学位記が授与されました。

吉村昇学長は卒業生、修了生に向けて「専門性はもちろんのこと、本学で培った教養の学識と、コミュニケーション力を駆使することを大事にしながら、これからの社会において信頼されて期待される存在となることを切に希望します。」とエールを送りました。



吉村昇学長

## 平成30年度 特別表彰受賞者

### 理事長賞

佐藤 真理、難波 万琴

### 学長賞

大谷 宏行、佐藤 直人、  
本間 可楠

### 後援会長賞

山崎 侑斗

# 平成31年度入学式を挙



4月6日(土)、公益ホールにて、2019年度東北公益文科大学・大学院入学式を挙行し、学部、大学院281名の新生を迎えました。

式典は肅々と執り行われ、吉村昇学長は式辞で、「大学は自由な発想で思索し、自立した生き方を考える無限の可能性のある四年間です。そこで学び、達成感を味わうことは、人生で最も貴重な時である。達成感・充実感のある学生時代を過ごしていただきたい。」と入学生へメッセージを送りました。

新田嘉一理事長による歓迎の辞のあと、新入生代表による入学の辞があり、高橋遥さんは、「大学4年間で幅広い知識を身に付け、多様な視点から物事を理解できるよう、人と交わり話を聴く力を磨きたい。また、企画提案力、発信力も身に付けたい。」と決意を述べました。



新田嘉一理事長



式では、来賓の方々からも祝辞を頂き、新入生に対する期待の高さがうかがえました。



吉村美栄子山形県知事



皆川治鶴岡市長



上野隆一後援会会長

式の後、公益ホールの外では在学生による各クラブ、サークルの勧誘や記念撮影の様子が見られました。



# 企業価値と社会的責任

准教授 倉持 一

倉持准教授は、経営学が専門で、CSRについて企業側の視点から研究しています。企業に関する様々な事象（トピック）をCSRの視点で理論づけする研究です。「企業は、アウトプットは得意だが、アウトカムは苦手な側面を持っている。」と倉持准教授は語ります。倉持准教授にCSRについて、また、倉持准教授が考える公益主義CSRについてうかがいました。

## —CSRとはなんですか

CSRはCorporate Social Responsibilityの略で、日本では企業の社会的責任と訳されています。

日本におけるCSR元年は2003年になります。

初期のCSRの考え方は、企業は経済的責任を果たすことで社会的責任を果たすという考え方でした。ここでは経済的責任と社会的責任は一緒との考え方になります。

なぜなら、企業は経済的利益を生むために作った組織なのだから、企業が直接的に社会的責任を果たすのはおかしいからです。そもそも企業は、便利で豊かな社会を実現するために商品、サービスを適正な価格で提供することで社会的責任を果たす。だから、直接的に寄附、ボランティアを企業が行うことはおかしいのではないかと、とのロジックです。

たとえば、自動車会社であれば、自動車を社会に提供することで、購入者はそれまでに比べ、より早く、より快適に目的地まで移動することができる。これにより、自動車会社は社会から対価を受け取り、利益を上げ、また、より良い社会づくりに責任を果たす。これが、初期の企業の社会的責任の果たし方、考え方でした。

いまでは当たり前になっていますが、企業が社会的責任を果たすうえで、寄附、ボランティアを行うことはおかしいのではないかと議論がありました。これは、企業が寄附行為を行うことは合法なのか、との法律的な議論がアメリカ、日本であったことに関連します。その後、この議論は「寄附行為を行うことは企業活動の一部として是認される。」として決着しました。それにより、企業が社会に直接的にアプローチすることも広く認められるようになりました。結果、企業の社会的責任の範囲は広がることになりました。

それまでは、経済的責任を果たすことが社会的責任

を果たすことにつながると考えられていましたが、企業が負うべき経済的責任と社会的責任は別物であるとの認識が一般化され、企業の責任がより増えることになったのです。そして企業は、社会的責任を果たす方法として、主に寄附、ボランティアで社会に貢献していくべきだろうと考え始めました。これが次の段階です。

日本でも企業が主体となって設立された美術館や音楽ホールなどが多数存在しますが、その設立は1960～70年代が中心でした。その時期、企業は文化、芸術への寄附活動を活発に行ったのです。メセナやフィランソロビーと呼ばれます。ヨーロッパでは、いまでもチャネルなどが文化、芸術活動の支援に熱心です。

以上のように、CSRに対する初期の認識は、「経済的責任をはたすことが社会的責任」でしたが、次第に「企業の社会的責任は経済的責任と分けて考えるべき」へと移行しました。

さらに21世紀になって登場した新たな考え方が、戦略的CSRやCSV (Creating Shared Value: 共有価値の創造) に代表される、「経済的責任と社会的責任とを一体化して考えるべき」という新たなCSRに関する概念や企業の実際の取組みになります。

## —戦略的CSRやCSVとは

両者を提唱したハーバード大学のマイケル・ポーター教授は、経営戦略が専門であり、企業がいかにライバルに差をつけて勝っていくかを理論化した具眼の士です。



ネスレ日本が熊本地震で被害を受けた農業の復興のための寄附につけた「キットカットミ」

彼は2000年代に入ると、企業はCSRを通じて他社に差をつけることが可能になると主張し始めました。

「ビジネスは社会課題を解決するソリューションである」と企業が位置づけることができれば、寄付やボランティアといった社会支援的なCSRとは異なり、自社の競争優位性を高める戦略的なCSRが実現可能となる。ポーター教授はこう考えたのです。

こうすることで、農家はより質の高いコーヒー豆を生産することが可能となり収入の向上が見込まれ、また、Nestléは独占的にその質の高い豆を供給してもらうことが可能となります。

貧困層が中心となるコーヒー豆農家の経済力の向上という社会課題の解決を通じて、他社よりも質の高い原材料を仕入れることができ、競争優位を獲得できる。ビジネスがソリューションになっています。

これが戦略的CSRやCSVの狙いです。ポーター教授の主張は日本でも広まっており、例えば伊藤園の茶産地育成事業、茶殻リサイクル事業などの取組みが有名です

—企業は競争優位を獲得できない場合、戦略的CSRやCSVに取り組みまないのですか

戦略的CSRやCSVが主張する「ビジネスはソリューションである」という考え方はきわめて魅力的ですが、企業が常に競争優位を得ることを保証しません。

近年、競争優位獲得の可能性が低い場合、企業は社会的責任の遂行に消極的になる傾向があります。戦略的CSRやCSVでは、競争優位の獲得が動機づけに紐づけられているので、そのような現象が生じるのです。

企業はそもそも、アウトプット（何を行うか）を考えることは得意ですが、アウトカム（どんな効果が生じるか）を考えることは苦手です。

CSRを通じていかなるアウトカムが社会に生じるのかを企業自身が見定めることは難しい。結果として、戦略的CSRやCSV が登場してCSRの考え方が広がりを見せているにもかかわらず、CSRの本質である社会的責任に対する企業の視野が狭くなっているように思います。

例えば、BtoB企業は、その特性上、自社のビジネスがソリューションとして作用することを実感することが若干難しい。BtoB企業の製品やサービスはかなり専門性が高いこと、他社のビジネスの一部に組み込まれてしまうことなどが主な原因ですが、結局は、社会課題の解決を競争優位獲得に結び付けづらいからです。

こうなると企業は、より消極的になってしまいます。しかし、社会課題の解決に企業が貢献していくことは社会からの要請であり、現状の社会課題を放置してよいも

のではありません。

## —公益主義CSRとは

そこで私は、公益の観点からCSRを捉えることが重要だと考えています。競争優位獲得に結び付く戦略的CSRやCSVに積極的にトライし公益を生じさせることも必要だし、それが難しい場合には、寄附やボランティアといった社会支援的なCSRで公益を生じさせていくことも必要。二段構えで、いかなるときも公益を生じさせていくわけです。

この考えに基づけば、公益を生じさせられない企業は存在しません。

CSRを公益の源泉として理解すれば、戦略的CSRやCSVの登場によって生じた、競争優位獲得に固執するというCSRの負の側面を取り除くことが可能となるでしょう。

最後にまとめれば、企業の視点だけでCSRを考えるのではなく、企業と社会の二つの視点からCSRを公益の源泉として捉えていく。この考え方が公益主義CSRになります。

今後は、この公益主義CSRを学術的に体系化し、説得力を増していく必要があると考えています。そのためには、経営学に限らず幅広い視点から研究していくのと同時に、数多くの実務家（企業人）の皆さんと共に考え共に悩むことも欠かせません。定期的に企業のCSR担当者などと研究会を開催していますが、その対象は大企業に限りません。中小企業に関する研究を行う商工総合研究所もCSR研究を行っていますし、20歳から40歳までの青年経営者の団体である日本青年会議所（JC）もSDGs（持続可能な開発目標）に対する取組みを活性化させています。

こうした機運を背景に、私は学術面と実務面との両方から公益主義CSRを展開していきたいと考えています。



倉持准教授が執筆に関わった東京財団政策研究所発行「CSR白書2018」



## 阿部 公一 教授 ゼミ

# 「年金ディベート道場!」 「来たれ!道場破り!!」



阿部教授の研究テーマは、「年金教育」「年金広報戦略」。公益財団法人日本教育公務員弘済会から研究助成を得て、2月に高校生向け教材「年金ディベート道場!」を発行。さらに、動画「来たれ!道場破り!!」を作成し、高校生向けに発信することを計画しています。阿部教授とゼミ生にインタビューしました。

一 高校生のための「年金ディベート道場!」を作成した理由は

2016年秋学期に1年生必修科目「基礎演習b」の授業で「年金ディスカッション」を行いました。その時、複数のチームから「生活保護があるから年金は必要ない」という意見が出ました。その発言に驚かされ、年金を論議にしたディベートゲームの必要性を痛感しました。このことが、今回の教材「年金ディベート道場!」(以下、「教材(冊子)」)を作成するきっかけになりました。

一 この教材のねらいは

今回のこの教材(冊子)は、厚生労働省年金局作成の「ねんきん情報アプリ」を活用した主体的な学びを前提にしています。このディベートゲームを通じて、公的年金が存在しない社会や、保険料を支払わなかった場合を想像させることで、公的年金の意義や必要性について理解を深めてもらうことをねらいとしています。



一 この教材とは別に映像、ビデオも作成されましたが

教材(冊子)は、主に高校の公民科目を担当する教員、大学等で経済教育に携わる教員、行政関係の年金広報担当者を対象にしました。関係する教員や年金広報担当者に若者の公的年金についての認識、理解度を知ってもらうことを戦略とし、経済教育ネットワークという団体のHIPから教材(冊子)をダウンロードできるようにしています。次の段階として、学ぶ側の高校生や大学生などに向けた発信が必要になります。そこで、実際に「年金ディベート道場!」への参加や、学ぶ仕掛けとして「来たれ!道場破り!!」の動画発信を計画しました。「年金ディベート道場!」への参加や学ぶ仕掛け、計画や戦略を

練ったのは私ですが、「来たれ!道場破り!!」の動画については、4年のゼミ生がシナリオ作成から、撮影及び編集作業までを行いました。

一 今後について教えてください

今後の展開として、ゼミ生と共にゼミのイベントとして、実際に高校生を対象として「ミニ・年金ディベート道場!」をオープンキャンパス等で開催したいと考えています。

一 今回の活動を通じての感想や気づきをゼミ生の前司美南さん(4年)に聞きました

年金制度について「自分たちが受給年齢に達したときにはもらえない」とか言われていましたが、先生の講義、ゼミを通じて理解を進め、今では「年金制度は絶対必要」と思っています。これからは、私たち若者が年金制度を正しく理解することが重要だと考えています。

今回の高校生向け「年金ディベート道場」の動画作成にあたって、特に工夫した点が2つあります。

1つは、立論と質疑応答の内容です。ポイントを抑えつつ、高校生が理解できる分かりやすい言葉で簡潔にまとめ、動画内の画面の見やすさにも気を配りました。

2つ目は、より多くの人が見たくなるような映像にすること。①可能な限りアップで ②大きな声で ③より明るい場所で撮影することです。見ている人に注目してもらえる映像にするため、先生からアドバイスをもらい、ゼミの皆で話し合い、撮影しました。動画撮影を始めた頃は、撮影するだけで精一杯でしたが、何度も撮り直し、回数を重ね細かなことにも気を配れるようになりました。

「人に理解してもらえる、見てもらうための映像にするためには工夫が必要。」ということを知り、年金制度についてもより理解が深まりました。



## いつでも・どこでも・だれでも天体観測

准教授 山本 裕樹



私は現在「インターネット望遠鏡」についての研究を行っています。インターネット望遠鏡とは、遠隔地に設置した天体望遠鏡をインターネットを通じて操作し、天体観測を行うための装置とシステムを指します。装置開発は主に五藤光学研究所、システム開発は主に私が担当しており、慶應義塾大学インターネットプロジェクト(以下KITP)として無料で一般に開放しています。KITPのウェブサイトのURLは <http://www.kitp.org/> です。

インターネット望遠鏡の特徴を一言で表せば「いつでも・どこでも・だれでも天体観測」になります。

1. 国内や海外にあるインターネット望遠鏡を使って「いつでも」天体観測ができる
2. インターネット環境があれば「どこでも」天体観測ができる
3. 無料で簡単に「だれでも」天体観測ができる

インターネット望遠鏡は、国内に4カ所(府中市、秋田市、横須賀市、平塚市)、海外に2カ所(アメリカ・ニューヨーク、イタリア・メラーテ)の計6カ所に設置しており、これらを結んで一つのネットワークを形成しています。例えば、ニューヨークは日本と14時間(サマータイムでは13時間)の時差があり、日本の昼間の時間帯でもリアルタイムにニューヨークの夜空の天体観測ができます。異なる2カ所のインターネット望遠鏡から同じ天体を同時に観測することもできます。また、自分のいる場所の天気が悪くて星が見えなくても、晴れている場所のインターネット望遠鏡を使って天体観測ができます。



観測風景 (山本准教授)



ニューヨークインターネット望遠鏡



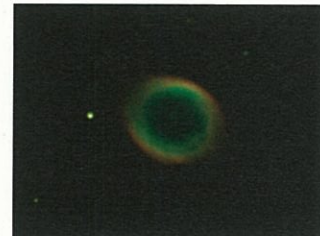
月面(サブスコープ)



月面(メインカメラ)



M42オリオン大星雲



M42オリオン大星雲

### 参考文献

慶應義塾大学インターネット望遠鏡プロジェクト, インターネット望遠鏡で観測! 現代天文学入門, 森北出版株式会社(2016).



渡邊 輝 (わたなべ ひかる)

地域経営系経営コース4年  
株式会社 hyoi 代表取締役CEO  
山形県立山形中央高等学校卒  
福島県出身

## 学生での起業を語る

株式会社 hyoi (代表取締役CEO 渡邊 輝)

### 一起業のきっかけ

インターンシップに行った初日の夜、恥ずかしい話、自宅に戻ってしまいました。「初めて人から指示を受けての仕事だったこともあるかもしれませんが、もしかして自分は会社勤めに向いていないのでは」と思うようになり、起業を考えるようになりました。そのことを母親に話したら「そうだと思っていた。うちの家系は、祖父も曾祖父も自分も個人事業を行ってきた。起業したいのであれば、簡単ではない、しっかり準備をして頑張りなさい。」と反対されるものと思っていたのが逆にエールをもらったことがきっかけです。

当時、経営コースの平尾教授に相談したところ「まずは起業サークルを立ち上げ、起業に関心のある学生で勉強会を開きながら起業の準備をしよう」となりました。

自分はファッションに興味があったので、オーダーメイドファッションでの起業を考えましたが、ファッション業界の厳しさから、ファッション業界での起業について悩み、迷走していることを仲間に相談したところ、一緒にIT分野での起業を目指すことになりました。仲間と議論を重ね、今回の「hyoi」という携帯アプリケーションのアイデアがまとまりました。

このアイデアをいままでいろいろと相談していた方にしたところ「どうせやるのであれば、本気でやるつもりであれば、会社を立ち上げ、資金を調達し製品化した方がいい。自分も応援する。」との言葉をいただき、昨年の12月に暦の良い日を選び株式会社 hyoi を登記、立ち上げました。



### 一開発中のアプリ「hyoi」について

携帯のアプリケーションで、スマートフォンの動画撮影機能を使用し、世界各地にいる協力者に依頼者の希望する風景などの動画をリアルタイムで撮影してもらい、依頼者はあたかも自分がその場にいるような疑似体験ができるものです。

マーケット調査でも過去に行ったことがある風景等をもう一度見たいというニーズは多いです。



### 一現在の株式会社hyoiの事業・活動

現在、「hyoi」アプリの開発を中心に事業を展開しています。

開発に携わっているのは自分を含め7名です。加速度をつけて開発を行う環境を整えるため、自分は主に資金調達、営業を行っています。

アプリは9月のリリースを目指しています。アプリ開発後も事業を継続するために、次の事業についても考えています。

まだまだ、いや全然楽な状況ではありませんが、自分が決め、今とても楽しく日々やっているので、この会社を成長させるため精一杯頑張っていきます。応援してください。

# We are Praxis!

学生地域支援  
活動チーム

## Praxis

(プラクシス)

Praxisとは…ドイツ語で「実践」という意味。

大学の中だけでなく、地域に出て活動しながら学んでいきたいという想いを込めて名付けました。自分たちの“好き”や“得意”を活かして、地域づくりにアプローチをしています。自分たちが企画した他に、地域のイベントにも参加し、住民の方との交流だけでなく、学生と地域と一緒に地域づくりを行っています。“大学生として今できること”を大切にしていきます。



### 活動目的

鳥海山の麓にある、山形県酒田市日向地区における大学の授業の延長として、学生が主体的に地域へ足を運び実践しながら学修します。

### 活動目標

「地域の内と外を繋ぐ場づくり」  
私たちはそれを「BAZUKURI PROJECT」と称して、主に“地域の暮らしからの学び”“地域にある土地、水、山などの自然資源の利活用”“地域のファンづくり”の3つを目標にしています。

### 主な活動

#### 〈AL COFFEE〉

酒田市日向地区にある、そば屋の空きスペースを借り、土日限定の学生カフェ「AL COFFEE (アル・コーヒー)」を運営しています。学生が自ら焙煎したコーヒーを提供する他、今年度はDIYで内装を手掛け、居心地の良い空間づくりをしていき、地域内外の人が“気軽に集える居場所づくり”を目指しています。

#### 〈星空キャンプ〉

地域の子どもたちを対象に、鳥海山麓の自然を満喫できる1泊2日のキャンプを企画・運営します。見落としがちな“地域の宝”を再発見できるプログラムを実施したいと考えています。例えば、地域の食材を使ったキャンプ料理体験、テント設営、火花、星空観賞等、普段できないことを思いっきり楽しめる機会を創るために準備を進めています。

さらに今年度は、地域住民のみなさんと共に「里山保全・利活用」について学ぶため、「荘内銀行ふるさと創造基金」の助成金を活用し、専門家の方を招いて講演会を開催する予定です。今後も循環型の地域づくりに「学生としてできること」を実践していきます。

### 今年度の活動方針・想いについて

これまででは、動画や雑誌などの手段を使って日向地区の魅力を発信してきました。今年度も引き継げるものはもちろん、私たち新メンバーにできる新しい実践を見つけ、地域に眠っている資源、例えば物・味・人・考え方などを私たち学生が引き出し、地域内外に発信していくことができたら良いなと思っています。

具体的には、今年応募し採択された～「荘内銀行ふるさと創造基金」の助成金を活用し、「日向 Survivor〜タフに、ラフに、生きるための地域づくり」をテーマとして、「星空キャンプ」「遊雪ランド」「里山保全・利活用に関する講演会」の3つの事業を実行しようとしています。

また、これまでの主な活動であったレストスペース「AL COFFEE」運営を継続していくことに加え、日向コミュニティセンター内に近くオープンする「コミセンジオカフェ」では、オープンまでの準備 (DIY) を手伝い、月に一度カフェの店長をさせていただける予定です。

